イスラエル考古学研究会

ニュースレター

No. 1

2005 年 10 月

イスラエル考古学研究会の発足

会長　金関　恕

私の書架に 2、3 冊の古びた聖書考古学の本がある。買い求めたものや、キリスト教徒の家庭で育って、考古学にも興味をもっていた父から与えられたものもある。古いだけで別に珍しいものではない。その 1 冊は、1873 年に英国の「パレスチナ調査基金」(Committee of the Palestine Exploration Fund) が刊行した『パレスチナにおける業績』(“Our Work in Palestine”) という菊版よりやや小型の書物で、1865 年創設の基金が派遣したワレン大尉、ウィルソン大尉などのエルサレム発掘調査のほか、初期のころの調査成果が概説されている。有名なポイティンゲルの巡礼地図の複製、等高線入りのエルサレムやガリラヤ湖周辺の地形図も挿入されていて楽しい。この基金設立の目的も発掘調査の目的も、聖地の遺跡の解明にあったことはいうまでもない。

もう一つは、高橋乙治著の『聖書と考古学』という A5 判に近い大きさのもので、カバーに「本書は邦語で出版された最初の聖書と考古学の文献である」と記されている。昭和 6 年 (1931)、大阪市の悲田院にあった日曜世界社から出されている。古い教会の書棚には今でも見られるかもしれない。神学校出身の著者は、シカゴ大学、バークレー大学などで聖書考古学を学び、牧師としても献身したという人である。

ここに紹介した 2 冊は、もとより専門的な研究書ではなく、広く読まれていたものであろう。日本で最初に聖書考古学の調査団を組織し、テル・ゼロールの発掘を行った大畠清先生は、旧制佐賀高校を 1925 年に卒業されて東京帝国大学文学部の宗教学宗教史学科に入学された。キリスト教の信仰者であった先生の業績目録をみれば、最初から旧約聖書学を志しておられたことが分かる。そうした興味から、聖書考古学にかかわる上記の書物を瞥見されたかもしれない。大畠先生の纏められた『テル・ゼロール』第 1 巻 (1966 年、日本オリエント学会刊) の序文の末尾に「イスラエルにおける遺蹟発掘調査を思い立ったのは、1959 年イスラエル政府に招かれて約 4 ヶ月イスラエルに滞在していた時であった。その後、思いをあたたむること 5 年、1964 年遂に計画を実行することが出来た。」と述べられている。聖地に考古学の鍬を入れる気負いのようなものが感じられるであろう。

テル・ゼロールが調査対象として選ばれたのは、

●●●　目　次　●●●

イスラエル考古学研究会の発足　金関　恕　1
「イスラエル考古学研究会」という名称　月本昭男　2

この一年の主な活動　3
第 3 回研究会のお知らせ　4

テル・レヘシュ発掘に向けて　4

規約　6
役員人事　6
お知らせ　6

ユダヤ王国建国期に当たる鉄器時代の歴史を考古学的に追及しようとする意図が秘められていたのだと察せられる。しかし世代が変わり、先生の後を継がれた後藤光一郎先生の場合は、フルトクランツなど北欧の宗教民族学者の宗教生態学の提唱に触発され、聖書考古学などのような「特定の宗教の考古学」に対する批判的態度を表明してられるように受け取れる (「宗教史学と考古学――生態学的関係づけ――」『宗教と歴史』脇本平也編 1977 年 山本書店刊所収)。私はそうした姿勢を感じる。

「聖地考古学調査団」の名のもとに発足した私たちの会は、現在の「イスラエル考古学研究会」への名称変更によって、一歩でも西南アジアの一地域考古学に近づくことになるのではないか、いくらかでも特定宗教から中立の立場を保持することになるのではないかと思う。

（天理大学名誉教授）

「イスラエル考古学研究会」という名称

副会長　月本　昭男

大畠清東京大学教授を団長とする西アジア文化遺跡発掘調査団が日本オリエント学会内に設けられ、テル・ゼロール遺跡発掘調査が開始されたのは 1964 年のことであった。1966 年まで 3 次にわたる調査が実施され、その成果は邦文と英文からなる報告書『テル・ゼロール I ～ III』(1966、1967、1970) として公刊されている。1974 年には第 4 次調査が行われたが、それ以後の継続はならなかった。

その後、1987 年頃と記憶するが、テル・アヴィヴ大学 M・コハヴィ教授から金関恕先生をはじめとするかつてのテル・ゼロール発掘調査団員に、コハヴィ教授自らが計画された考古学研究プロジェクト (The Land of Geshur Project) への参加の打診があった。これを検討し、数年の準備期間を経て、

エン・ゲヴ発掘調査最終状況

日本隊によるガリラヤ湖東岸のエン・ゲヴ遺跡発掘調査を開始したのが 1990 年である。第 1 ～ 3 次の団長をつとめられた金関恕先生はこれをテル・ゼロールを継承する発掘調査と理解され、発掘調査を担う組織を「日本聖書考古学発掘調査団」と名付けられた。エン・ゲヴ遺跡発掘調査は文部省 (日本学術振興会) の科学研究助成金科学を受けて 2004 年まで断続的に実施された。第 4 次 (1998) より月本が団長役を引き受け、現地における発掘調査自体は第 8 次 (2004) をもって終結した。

この間、日本隊によるエン・ゲヴに続く発掘調査遺跡として、コハヴィ教授はテル・レヘシュを提案された。テル・レヘシュはかつてテル・ゼロールと共に日本隊の発掘調査地候補とされた遺跡でもある。エン・ゲヴ調査団は何度かテル・レヘシュ遺跡を視察し、コハヴィ教授の提案を受け入れた。しかし、遺跡の規模において、テル・レヘシュはテル・ゼロールやエン・ゲヴをはるかに上回る。発掘調査がそう簡単に実現するとも思えなかった。そこで、金関先生からの示唆もあり、エン・ゲヴ発掘調査団員を中心に、新たに「イスラエル考古学研究会」を立ち上げ、その準備にあたることになったのである。「イスラエル考古学研究会」という名称は、テル・ゼロールおよびエン・ゲヴ遺跡発掘調査団の名称と比べ、2 点において新しい。ひとつは「日本」という頭辞をつけなかったことである。これからの発掘調査はいままで以上に国際的であらねばならない、と考えたからである。もうひとつは「イスラエル考古学」という呼び方である。

周知のように、イスラエルおよび周辺地域の考古学的研究の名称は、「聖書考古学」「聖地考古学」「イスラエル考古学」「パレスティナ考古学」「南レバント考古学」等々、学問上の立場のみならず、政治上の問題もこれに絡んで、一定しない。そのなかで、あえて「イスラエル考古学」が選ばれた。第一に、私たちの当面の目標である遺跡テル・レヘシュは国連で承認されたイスラエル領 (占領地域でなく) にある。第二に、先輩方が培ってこられたイスラエルの先生方との友情はかけがえのない財産であり、これを抜きにして今後の発掘調査の実現は不可能である。第三に、「日本西アジア考古学会」に連なる私たちが「聖書」や「聖地」を用いることによって宗教的立場を前面に出すことは好ましくない。そう考えての選択である。

当初、テル・レヘシュの発掘調査の実現までは少なくとも 5 年はかかるであろう、と予想した。しかし、さいわいなことに、置田雅昭団長のもとで明年にもこれに着手できるであろう。エン・ゲヴ発掘調査の最終報告書の刊行をひかえて、嬉しい悲鳴が聞こえそうである。多くの方々の支援と協力をお願いしたい。

（立教大学教授）

◇◇ この一年の主な活動 ◇◇

第 1 回研究会

2004 年 12 月 25 日　於：八王子市北野南部会館

発　表

名取四郎 (立教大学教授)

「チュニジア古代紀行――スベイトラとハイドラを中心に――」

月本昭男 (立教大学教授)

「エンゲヴ遺跡発掘調査総括」

第 2 回研究会

2005 年 3 月 4 日　於：立教大学

発　表

宮崎修二（立教大学非常勤講師）

「『聖書考古学』の現在 ――鉄器時代の絶対年代議論を中心に――」

巽　善信（天理参考館）

「テル・ゼロール出土遺物の受け入れ」

＜刊行物＞

エンゲヴ発掘調査

2003 年の第 7 次調査の短報がイスラエル考古局の年報 *Hadashot Arkheologiyot* 117 (2005) に掲載されました。印刷版はなく、電子版のみです。

URL: http://www.hadashot-esi.org.il/reports_list_eng.asp

◇◇ 第３回研究会のお知らせ ◇◇

2005 年 11 月 12 日（土）13:00 ～　　於：天理大学２号棟考古学実習室

13:00 ～ 15:00
記念講演　イツハク・パズ（テル・アヴィヴ大学）
「青銅器時代のガリラヤ地方」（仮）
（15:00 ～ 15:20　休憩）
15:20 ～ 16:00
牧野 久実（滋賀県立琵琶湖博物館）
「ペルシャ～ヘレニズム時代のキンネレット湖の水運に関する一考察」
16:00 ～ 16:40
越後屋　朗（同志社大学）
「メギドにおける VI 層の年代決定について」
16:40 ～ 17:20
桑原　久男（天理大学）
「エン・ゲヴからテル・レヘシュ」
18:00 ～　懇親会

テル・レヘシュ発掘に向けて

海岸の平野から間道を抜けて、メギドを背に見ながら真っ直ぐにエズレル平野を縦断し、アフラ経由でガリラヤ湖を目指す道の途上にひときわ目立つ丸い山があるのをご記憶の方も多いだろう。イエスの豹変などの物語でよく知られたタボル山である。現在、発掘計画が進められている遺跡テル・レヘシュ (Tel Rekhesh) はそのタボル山の麓を走る幹線道から東に 8 キロほど入ったところにある。周囲を台地に囲まれ、高みから見下ろすと盆地の端にある丘のように見える南北に長い楕円形の遺跡である。近くを流れるワディの河床から頂上部まで約 60m の高さをもち、斜面はいずれの方向から登ってもかなり急である。

遺跡に立ってみてまず思うことは、なぜこのような場所にこのような大きな居住跡があるのかということであろう。遺跡の下部の初期青銅器時代と想定されるテラス状の部分を含めると遺跡全体は 4 ～ 5ha の広さをもつ (上部では 1 ～ 2ha)。時代的には、先史時代の遺物も遺跡周辺から採取されているが、青銅器時代から鉄器時代、さらにはローマ・ビザンチン時代を含み、断続的なものであったとしても、それぞれの時代にかなり規模の居住があったことが想像される。しかし、今日遺跡に立って周囲を見渡せば、周辺は見渡す限りの山地であり、北西に遠く望むタボル山が遺跡に辿り着くまでに辿ってきた荒れた道を思い出させるばかりである。かつてレヘシュがこの地域の中心のひとつであったと想像するのはなかなか困難なことである。それは 20 世紀初頭にこの地域を踏査した A・サリサロも同様に抱いた印象であった。

テル・アヴィヴ大学のコハヴィ教授から新たな発掘の候補地としてテル・レヘシュが提案されたのは 2003 年の春のことであった。その年の夏、エン・ゲヴ発掘の合間にレンタカーで地図だけを頼りにテル・レヘシュを目指した。案内も請わずに未知の遺跡に辿り着くのは至難の業である。結局、その時はレヘシュを実地で見ることは叶わなかったが、見当をつけていくつかの遺跡らしい場所を歩き、土器を拾い集めた。古い時代のものはなかったが、鉄器時代以降の土器を見つけることは難しいことではなく、今ではただの谷あいの道が通るばかりと思われる土地にかつてある程度の規模をもった居住地が少なくともいくつか点在していたであろうことは想像できた。

レンタカーで走った道はトレッキング・コースとなっており、道ぞいの土地はかなりの規模で農地として利用されていた。もちろん、現代の灌漑設備があってこその規模であろうが、古代においても農

テル・レヘシュとその周辺

地としてある程度利用されていたと思われる。そのまま道なりに走っていくとメナヘミヤというヨルダン渓谷へと下っていく斜面にある集落のはずれに抜け、そこからは遠くガリラヤ湖を望むことができた。このときのレヘシュ探訪の試みは通りすがりではあるにせよ周辺の土地を観察するよい機会であった。

タボル山の南、エズレル平野のはずれからそのメナヘミヤのあたりまでの土地は聖書ではイッサカルの地と呼ばれており、先に挙げたサリサロの後にも70年代にN・ツォリ、80年代にはZ・ガルによって踏査が行われている。テル・レヘシュはその規模からいって疑いなくイッサカルの中心のひとつであったはずである。その古名についてはヨシュア記19章19節に見えるアナハラトが挙げられる。アナハラトは二つのエジプト文書、トトメス三世のパレスティナ遠征に伴う地名リストとアメンホテプ二世の遠征記録に言及されているi-n-h-r-tとされており、少なくともその時代、前15世紀にエジプトの文書に言及されるだけの意味をもつ場所であったことが想定される。それだけにいろいろな遺跡との同定が試みられてきたが、現在では若き日のコハヴィ教授も参加していた調査の結果を受けて、Y・アハロニによって提案されたレヘシュとの同定が最も有力とされている。キブツ・エンドルの小さな博物館に展示されているレヘシュからの遺物がエジプトとの関係あるいは後期青銅器時代の居住を示していることも有力な傍証となっている。

最近、A・ヨフィらによって周辺調査および簡単な試掘が行われたが、この規模の遺跡で本格的な発掘が行われていないのはイスラエルではテル・レヘシュが最後といわれている。それだけにその遺跡を調査する責任も大きいといえよう。

（宮崎修二）

訃　報

本研究会の第1回研究会でもご発表いただいた立教大学教授名取四郎先生が2005年10月7日、お亡くなりになりました。先生には1999年のエン・ゲブ第5次発掘調査などの活動にご参加いただきました。ご冥福をお祈りいたします。

イスラエル考古学研究会規約

2004年10月25日制定

第1条　名　称

この研究会は「イスラエル考古学研究会」（以下「本研究会」）という。

第2条　事務局

本研究会の事務局は当面の間、奈良県天理市杣之内町1050番地、天理大学文学部考古学・民俗学研究室におく。

第3条　目　的

本研究会はイスラエルおよびその周辺地域の歴史・文化・宗教に関する考古学を中心とした研究成果の発表および研究調査を行うことを目的とする。

第4条　事　業

上の目的を果たすために以下の事業を行う。

イ．研究発表会の開催
ロ．ニュースレターの発行
ハ．イスラエルおよびその周辺地域の調査研究
ニ．その他

第5条　会　員

本研究会の会員は上記の趣旨に賛同する者とする。

第6条　会　費

会費は細則に定めるものとする。

第7条　役　員

本研究会は会長、副会長、役員7名（正副会長を含む）をおく。正副会長並びに役員は任期を3年とし、役員は一般会員の互選、会長は役員による互選とする。但、重任は妨げない。

第8条　会　計

本研究会の会計は事務局が行う。

第9条

本規約の改定は役員会で発議し、会員の承認を得るものとする。

会費に関する細則

一、会費は当面の間、年2000円とする。学生の会員は年1000円とする。

役員人事

2005年3月4日、立教大学での研究会に際して、2005年度から3年間の正副会長および役員が以下のように決定された。

会　長：金関　恕（天理大学名誉教授）
副会長：月本 昭男（立教大学教授）
役　員：置田雅昭（天理大学教授）、桑原久男（天理大学助教授）、杉本智俊（慶応大学助教授）、山内紀嗣（天理参考館）、山我哲雄（北星学園大学教授）〔50音順〕

原稿募集

発表した論文の要約、関連書籍の書評など、掲載原稿を募集いたします。掲載ご希望の方は下記の天理大学文学部内事務局までご連絡ください。また、本ニュースレターに関するご意見、ご要望もお寄せください。

会員募集

イスラエル考古学研究会では広く会員を募っています。本会の趣旨にご賛同いただける方であれば、どなたでも参加できます。入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。

イスラエル考古学研究会 ニュースレター　No. 1

2005年10月25日

編　集：　巽 善信　　宮崎 修二

発　行：イスラエル考古学研究会

〒632-8510
奈良県天理市杣之内町1050番地
天理大学文学部　考古学・民俗学共同研究室内
e-mail: israelkai@yahoo.co.jp
郵便振替口座
00960-3-79256　イスラエル考古学研究会